研究課題名：結節影の診断目的で気管支鏡検査を施行後の呼吸器感染症発症頻度の検討

研究期間：西暦 2016 年 1 月 1 日～2018 年 12 月 31 日まで

対象材料：

■ 診療録　2016 年 1 月～2018 年 12 月までに肺癌の診断目的で気管支鏡検査を行われた症例。

意義、目的：　気管支鏡検査は各種肺疾患の診断のため広く行われている検査である。その合併症として、発熱や検査後の肺炎があり、検査後の発熱の頻度は約２０～２５％と考えられているが、検査後の肺炎発症の頻度に関しては不明な点も多い。気管支鏡検査後の抗菌薬の投与は、検査後の発熱や肺炎の発症を予防しないとされ、ているが、検査後の呼吸器感染症発症の頻度は、基礎となる肺疾患や患者背景等の影響もあると考えられる。そこで、肺疾患として肺癌を疑って気管支鏡検査を行う場合における、検査後の肺炎発症の頻度、および危険因子を明らかにする。

方法

2016 年 1 月～2018 年 12 月末までに結節影の診断目的で気管支鏡検査を行った症例の、検査後２週間以内の呼吸器感染の有無を確認する。また、呼吸器感染症を発症した場合としなかった場合の差が何であるかを、下記の項目について検討する。

検討項目：

査前の身長、体重、BMI、PS, TP, ALB, TC, TG, BS, HbA1c, 肝腎機能、電解質、血ガス所見、基礎疾患の有無、腫瘍の大きさ（最大径）、場所、性状（誘導気管支の狭窄の有無、壊死の有無）をチェックする。

発熱が出現した場合は速やかに受診し、呼吸器感染の有無をチェック（胸部 X 線、炎症所見をチェックする。必要があれば胸部 CT を撮影）。その結果をみて、適切な治療を行う。すべて通常の診療の範囲内での観察研究。

問い合わせ・苦情等の窓口：

磐田市立総合病院　呼吸器内科：　妹川史朗　0538-38-5000